

らわさせ、前者は初期経験が成熟後の摂取を増させ好む傾向をあらわすと考えられる。ガーリックは他に比して全般的に摂取率高く、初めて接する場合はより刺激されるようである。

以上より、食物に対する好き嫌いの発生は幼少期の食経験がある程度関係のあることがうかがえる。

E-4 食物好悪の発生と初期経験

お茶大家政 浅見千鶴子

1. 個体の食物好悪の傾向の発生と幼少期の食経験との関係をシロネズミ幼児(約25日)を用いて検討した。

2. 離乳後間もないシロネズミ幼児を総計51匹用いて、実験群と統制群に分け、実験群には常食の粉末餌料に特定の食品を混じて与え、約2週間飼育する。その後常食に切りかえ、成熟後(約70日)にテストを行なう。統制群には特定食品は混ぜずに同様に飼育、テストを行なう。特定食品として、洋カラシ粉、カレー粉、トーガラシ粉、ガーリック粉、およびバニラ液の5種を用いた。

テストは各個体ごとに実験食(特定食品を混ぜる)と統制食(混じらない)を等量ずつ呈示し、1日間食べさせ、その摂食量を測定する。

3. 各個体ごとに全摂食量に対する実験食のそのの比を算出し、実験群と統制群とを比較する。実験群の方が摂食率の高い食品はトーガラシとバニラで、他は統制群の方が高かった。同じような刺激性食品でも後者は初期経験が成熟後の摂取をおさえ、いわゆる嫌いの傾向をあ